# 当院の原因不明消化管出血症例と内服薬の推移

○半田　修[1)]、三澤　拓[1)]、笹平百世[1)]、葉　祥元[1)]、
半田有紀子[1)]、福嶋真弥[1)]、大澤元保[1)]、村尾高久[1)]、
松本啓志[1)]、本多啓介[2)]、梅垣英次[1)]、塩谷昭子[1)]

１）川崎医科大学　消化管内科学
２）淳風会ロングライフホスピタル

【背景】
原因不明の消化管出血（OGIB）の診断にカプセル型小腸内視鏡は有用である
しかしOGIB症例の内服薬の変遷について詳細に調べた報告はない。
【目的】
当院の OGIB 症例の動向と非ステロイド性抗炎症薬（NSAID）や抗血栓薬処方状況の推移を調査し、予防や治療の一助とする。
【方法】
当院で2007年１月から2021年５月にカプセル型小腸内視鏡検査を施行した994症例のうち、OGIB精査目的であった症例で、内服薬（NSAID、抗血栓薬）、NSAID外用薬について前期（2012年以前）と後期（2013年以降）に分けて比較検討した。
【結果】
前期と後期でカプセル内視鏡施行数に有意差はなく、半数がOGIB症例であった。前期に比べて後期ではOvertが減少していた。前期・後期ともDOACに比べてワーファリンの内服症例が多かった。ワーファリンでは血管性病変が有意に多かった。後期群のOGIB症例でNSAID湿布処方症例が有意に増加していた。
【結論】
当院のカプセル内視鏡施行症例のうち、OGIB 症例の占める割合は減少しているが、NSAID外用薬に起因する小腸出血例が増加している傾向が認められた。

一般演題